ポケットモンスター オレガイル&ハマチ

d d

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケモンの世界に俺がいる「はまち」のキャラがいたら、というクロオバ物です。

目　次

誰にだって旅立ちの日は訪れる ―― 1
譲り合わぬ彼と彼女はいつも衝突している ―――――――― 7
少し抜けている彼女はいつも優しい 17
月下に映る影一つ ―――――――― 25
それでも人々はポケモンと生きていく 35
誰にだって旅立ちの日は訪れる2 43

誰にだって旅立ちの日は訪れる

ポケットモンスター、縮めてポケモン。
この星の不思議な不思議な生き物。
海に、森に、町に。その数は百、二百、…三百いや、それ以上かもしれない。
そしてこの少年、チバシティのハチマン。
齢１７にもかかわらず毎日だらだら暇を持て余す引きこもり。
１０になったらポケモンを手に旅に出るという決まりを破りいつまでも親の脛をかじりプレイ&スリープ。
「うるせーほっとけ」
俺は今日も今日とてポテチを箸で摘まみ寝転びながらゲーム機を操る。
今は通信対戦の真っ最中、旅になんかでなくてもこうして腕を磨けるのだから無問題だ。
「あ…」
攻撃が急所にあたりもうスピードで減っていく緑のバー。
勢いはとどまらずそのままゼロになった。

俺はゲーム機をＨＰバーのごとく勢いよく投げ飛ばした。
布団にはねて転がったゲーム機の画面には敗北の二文字が浮かぶ。
俺はそのままマットに倒れこんだ。
「マジでクソゲー、もう二度とやらん」
起き上がって電源をＯＦＦにすると棚にしまった。
しかしそうなると他に玩具がない。
この世界にはまともなゲームがポケモンくらいしかないのだ。
「あー、暇」
「もう、そんな乱暴に使ってたら壊れちゃうよ」
突然の声に扉の方を見る。そこには愛しのマイシスター、コマチが立っていた。
「また帰って来たのかお前」
「お兄ちゃんが心配だからだよ、あっ、今のコマチ的にポイントたっかいー！」
小町は5年前にポケモントレーナーになったのだが、それからもちょくちょくこの家に帰って来るのだ。
「お兄ちゃんもそろそろ博士にポケモン貰って旅に出ればー？」
「いや、俺この町から出ててはいけない病で…」
「そんな病気ないでしょ、…今なら可愛い可愛いコマチがついてくるよ？」

魅力的な提案がされていたがしかしもう7年もしきたりなんざくそくらえと無視してきた手前今さら顔を出すのも照れ臭い。
「ほら、あれだよ、俺は平和を愛する人間だからポケモンバトルとか？野蛮なことしたくねぇんだよ」
「さっきゲーム機投げ捨ててたじゃん」
見られていたのか…。
「でも、…今さら恥ずかしいし…」
「もー、お兄ちゃんってほんと口だけ…、いいからさっさと行くよ」
「あっ、待て、引っ張るな…」
そうして俺は町の端にある研究所に足を運んだ。
「ハーチーマーンー、貴様よくもここに顔を出せたな!?」
敷地に足を踏み入れた瞬間、研究所の所長であるヒラツカ博士がドスの聞いた声で笑いかけてきた。
「どうも…、お久しぶりです」
「同じ町に住んでて久しぶりもないがな…、お前私を見かけると逃げていくだろう」
「ははは、俺って準伝説並のレア物なんすよ」
すると俺の顔めがけて拳が跳んでくる。それを間一髪でかわす。

「減らず口を言うのはこの口かー？」
　いや完全に別の意味で口を塞ぎに来てただろ今。
「まったく、それはゲームの話だろう、伝説のポケモンなんてしょせんはおとぎ話だ」
「ポケモン研究者がそんな事言ってて良いんですか、ていうかなんでゲームだって知ってるんです？」
「そっ、そんな事はいいだろ。今日はいったい何しに来たんだ？」
「はい、実はですね、最初のポケモンをいただこうかと」
「ほーう、旅に出る理由がないなどとぬかしていたお前がなぁ」
「無理矢理つれてこられたんですよ」
　ヒラツカ博士はその話を聞くと少し困ったような顔をした後研究所の奥に消えさり、しばらくしてから戻ってきた。
　その腕には三つのモンスターボールが抱えられていた。
「ではこの中から選んでくれ」
　そう言って三つのモンスターボールからポケモンを出現させる。
　一つ目はドガース。
　二つ目はベトベター。
　そして最後はアーボ。

「って、全部どくタイプじゃねぇか!!?」
　もしかしてハチマン菌と相性が良いとか？やかましいわ！
「すまない、実はさっき来た子で用意していたポケモンは全部出してしまったんだ。だから仕方なく最近毒ポケモンの研究の為に捕まえた彼らをと…」
「ただの在庫整理じゃねぇか！」
「うるさい！そもそもお前がいつまでも受け取りに来ないからだぞ」
　あーもういいや、やっぱり旅になんてでないで家でごろごろしてた方がいいんだ。うんそうしよう。
　決断力を見せた俺は続いて実行力を見せるべく研究所を後にしようとする。
「あっ、もう家には入れないってお母さんと約束して来たから」
「はー!?」
　どうやら既に退路はたたれてしまったらしい。
「ん？」
　悲しみにうちひしがれうなだれる俺の足をつつくものがいる。
　それはさっきヒラツカ博士が持ってきたうちの一体、ヘビポケモンのアーボだった。
「ふむ、どうやらお前のことが気に入ったようだな」
「お前、俺を慰めてくれるてるのか？」

「シャー」
　なんてことだろう、今まで穀潰しだとかナマケモノだとか卑下にされてきた俺をこんなにも思ってくれるなんて。
「ヒラツカ博士、俺、こいつに決めました」
「そうか、ではこれを」
　俺は博士からアーボのモンスターボールを受けとる。
「それからこれも渡しておこう」
「なんです、これ？」
「ポケモン図鑑だ、ポケモンをゲットすればそれにデータが記録される。もし珍しいポケモンをゲットしたら報酬も出るぞ」
「まじか！、よっしゃーやるぎ出てきたぜ！」
　以外と旅もいいものかもしれない。
「お兄ちゃん…、さっきまでの感動が台無しだよ…」
　こうして俺の報酬を目指す旅が始まった。

譲り合わぬ彼と彼女はいつも衝突している

さすがにてぶらで旅に出るわけにはいかないのでいったん家に変えることにした。
「おやハチマン、ちゃんとポケモンは貰えたの？」
「ああ」
俺は博士からもらったモンスターボールを見せる。
それで扉の前をとおせんぼしていたお袋をどかした。
とりあえず要りそうな物を持てるだけバッグに詰める。
「そういえばヒラツカ博士から研究所に来てくれってメッセージが来てたよ」
「なんだそりゃ、さっきあったばっかだろうに、年か？」
準備を終えた俺達はさっそく研究所へと向かった。
するとヒラツカ博士は黒い長髪の女と何やら話し込んでいた。
「来ましたよ」
「ああ、何度もすまない。これを渡すのを忘れていた」
ヒラツカ博士は空のモンスターボールを５つ俺に手渡す。
「これがなければゲットしようがないからな。ショップで買うこともできるが、まあ、旅

立ちの記念だと思ってくれ」
「博士、隣の綺麗な人は誰ですか」
　コマチが余計な事を言い出す。確かに綺麗だけどよ。
「彼女は…」
「エリートトレーナーのユキノです」
　すると博士の言葉をさえぎって自ら自己紹介するユキノ。
「うわぁ、自分でエリートとか言っちゃうのかよ…」
　するとユキノが睨み付けてくる。
「その年になるまで旅にでなかった引きこもり君に言われたくないわね」
　なんだこの女初対面の相手に向かって。
「いや俺の旅立ちとは限らないだろ」
　若々しいコマチならまだ十歳位には見える筈だ。
「いや、お兄ちゃんの旅立ちでしょ」
　しかし実の妹からのまさかの裏切りに合う。
「はぁ、どうして直ぐばれるような嘘をつくのかしら。姑息な男」
「うるさいな、無意味な慣習とか嫌いなんだよ」
「旅に出るのが怖かっただけでしょう」

俺とユキノは互いに睨み合う。
まさに一触即発、お互いをたたきふせんと視線が火花を散らす。
「そうだ、ならばポケモンバトルをしたらどうだろう」
するとヒラツカ博士が口を挟んできた。
「ヒラツカ博士?」
「意見が合わない相手もいるだろう、そういうときはバトンで決着をつけるのが習わしだ」
「いや、だからそういうのは嫌いだって…」
「私とこの人とでは実力に差がありすぎます」
「なんだ?負けるのが怖いのか?」
「…っ…、いいでしょう、そんな安い挑発に乗るわけではありませんが、この男には立場の違いをわからせる必要がありますから」
おいおい、完全にのせられてるぞこいつ。ていうか俺の意見が無視されてるんだけど。
「シャー、シャー」
すると聞き覚えのある鳴き声が聞こえてくる。ヒラツカ博士から貰ったアーボだ。
こいつ、いつのまにボールからでてきたんだ?

「どうやらそいつは戦いたがっているようだな」
「はぁ、わかりましたよ」
　というわけで何故か俺とユキノは勝負することになった。
　敷地のそとに出て裏にあるバトルフィールドに移動する。
「使用ポケモンは一体、どちらかが戦闘不能と判断された場合、決着とする」
　宣言を聞いた俺はアーボを繰り出す。ていうかこいつしかいない。
「ビギナー相手に本気を出すのはみっともないから手加減してあげるわ」
　ユキノは綺麗なフォームでモンスターボールを投げる。
　そこから赤い光を纏って出現したのは、ユキワラシだった。
　未進化のたねポケモン、手加減というのはほんとらしい。
　ユキノとユキワラシってねらってるんですかね？
「バトル…始め！」
　ヒラツカ博士の開戦の合図と共にフィールドを緊張感が包む。
　俺にとっては始めての実践だ。
「ユキワラシ、こおりのつぶて！」
「どくばりだ」
　直後氷と針の弾丸が衝突し白煙を産む。

アーボはそれに包まれてしまった。
ちっ、こおりのつぶては初動が早い。その分押し込まれてしまったのだ。
「尻尾で煙を払え」
扇風機のように尻尾をふり徐々に白煙が去っていく。
しかしそれは次に驚異を産み出した。
ユキワラシが分裂している。
フィールドでは複数対に及ぶユキワラシの群れがアーボを取り囲んでいた。
「シャ!?」
「落ち着け、これはかげぶんしんだ」
しかし本物以外は全て残像だ。動けるのは本物だけ、攻撃時をよく観察すれば見分けられるはず。
その瞬間を目を凝らして待つ。
しかしその時はいっこうに訪れない。
この沈黙が嫌な予感を俺に伝えてくる。とにかくこれ以上待っていたら取り返しのつかないことになると、そう直感した。
「アーボ、にらみつける」
アーボの視線が鋭くなる、これなら向こうがこっちを見ていたら効果があるはずだ

し、隙も少ない。
「もう一度だ」
その瞬間、若干怯んだユキワラシの一体を俺は見逃さなかった。
「右前方にどくばり」
その個体に毒を帯びる針が向かっていく。
にらみつけるでだいぶ防御が下がった筈だ。当たれば大ダメージは避けられない。
そして怯んだユキワラシは攻撃を避けられない、もらった。
しかし針はユキワラシの横を素通りした。
もうスピードでそれをかわしたのだ。
「なっ!?」
その後も右に左に物凄い速さで撹乱してくるユキワラシ。
あり得ない、あいつにそんな素早さはない筈だし、積み技も使ってない筈だ。
なのに、どうして…。
「まさか…」
一つだけ思い当たるものがあった。それは。
「…むらっけ?」
数秒ごとに能力の一つを2段階あげ、一つを1段階下げる特性。

「夢特性じゃねぇか」
手加減すると言っておきながらこの仕打ちだ。相当の負けず嫌いであることがうかがえる。
こうしている間にも差し引き1段階づつ能力が上がっていく。その配分も読みづらい。
「ユキワラシ、こおりのつぶて！」
「かわせ！」
飛来する氷の散弾をアーボはなんとかかわそうとするが、上昇したすばやさを乗せて向かってくる礫を尻尾に掠めてしまう。
「シャー!!」
「アーボ！」
ヘビは爬虫類だ、寒さには弱い。
「どくばり！」
連続でどくばりを吐き出すがやはりユキワラシにはかすりもしない。
「どうやら勝負は決まったようね」
「お兄ちゃん…」
「どくばり！」

「何度やっても無駄よ」
アーボの攻撃はもはや当たるはずもなかった。
「これで最後、ユキワラシ、こおりのキバ！」
ここで始めて出す技。恐らくこれがあのユキワラシのフィニッシュブローなのだろう。
あれが当たれば勝負がついてしまう。
「どくばり」
向かってくるユキワラシに最後の望みをかけて攻撃をうつ。
しかしそれもかわされてしまった。
直後ユキワラシの口とリンクした巨大な氷の顎がアーボを噛み砕いた。
「アーボ、戦闘不能！ユキノの…」
「え？」
そして勝利を確信して喜びに浸るユキワラシを倒れてきた巨木が押し潰した。
「なっなんだ!?」
「ユキワラシ！」
慌ててそこに駆け寄るユキノ。
ユキワラシは防御を下げられていたこともあって目を回していた。

それを見届けると俺は同じく戦闘不能になっているアーボをモンスターボールに戻す。

そして博士にことの次第を追求する。

「戦闘中にトレーナーがフィールドに入るのは反則じゃないっすか？」

「それはそうだが…」

それを聞いたユキノが俺を睨みつけてくる。

「貴方のアーボは既に戦闘不能になっていたわ！」

「だが審判はまだコールしていなかった、それを無視するなら何のための審判だ？」

「減らず口を…、それに周りの木を使うなんて反則でしょう」

木にはどくばりで何度も傷つけられた後が残っていた。

当然だ、俺が狙って倒させたのだから。

「環境に応じたバトルもトレーナーのテクニックだ」

俺とユキノは試合前と同じように睨み合う。

「仕方ない、今の勝負は私の預かりとする」

するとヒラツカ博士が同じように口を挟んできた。

「しかし、それでは勝負の決着が…」

「なら一緒に旅をしてお互いを理解していけばいい」

「はぁ？」
　また一体この人は何を言っているんだ。
「ハチマン、庭の木を倒したのは立派な器物損壊罪だ、ジュンサーさんを呼んでもいいんだぞ？」
「は？いや、あれはバトル中で仕方なく…」
「狙ってやったことに変わりはないな」
「ぐ…」
「ユキノも、ハチマンはまだまだ初心者だ。君がついていろいろと教えてやってほしい」
「この男が素直に聞くとは思えませんが…」
「それなら自業自得だ、だが近くで手本になることはできるだろう？」
「…わかりました」
「あわわ、なんだかすごい展開になってきたよー」
　こうしてなぜだか俺達の旅に同行者が増えることになった。

少し抜けている彼女はいつも優しい

「お…い、ユキノ…ちょっと休もうぜ」
「気安く呼ばないで貰えるかしら。仲間だと思われたら不愉快だわ」
旅にでたはいいものの常に歩き通しでもうへとへとだ。
「ユキノさん、お兄ちゃんは今まで引きこもっていたので足腰が弱いんです」
いや引きこもってないから、たまに散歩とかしてたから。
「お願いします、ユキノさん」
コマチのうわめづかいが決まった、効果は抜群だ！
「仕方ないわね…、いったん休みましょうか」
俺達は木の根本に腰をおろして休憩する。
「シャー、シャー」
「ああ、その辺の木のみでも食べてこい」
勝手にボールから出てくるアーボが俺にまとわりついてくる。蛇の鱗はひんやりとしていて少し気持ちいい。
「貴方、ポケモンの言葉がわかるの？」

「わかるわけねぇだろ、何となくだよ」
日頃から人の裏をよんでいたらいつのまにかちょっとした仕草でポケモンの気持ちがわかるようになった、たぶん。
パシュウ。
隣でコマチも手持ちのポケモンをボールから出す。
「イッブイ」
「イーブイも遊んできな、あんまり遠くに行っちゃだめだからねー」
あのイーブイがコマチのパートナーだ。俺はアーボだというのに格差が酷い。
「シャー」
そんなことを考えていたのを知ってか知らずかいったん離れたアーボが再びじゃれついてくる。
「よしよし」
「シャー　」
撫でてやると気持ち良さそうに鳴いた。
「以外ね、貴方がそこまでコミュニケーションをとるなんて」
「そうか？別にポケモンは嫌いじゃねぇぞ俺は、人間の方が明らかにおぞましいからな」
人間の言葉は理解するくせに話せはしない。その微妙な距離感が何となく心地いい

と感じる。
「お前は手持ちを出さないのか？」
「そんなことを言って、私の手持ちを確認するつもりなのでしょう？」
ちっ、ばれてたか。
自分からエリートをなのるこいつだ。手持ちが育て始めのユキワラシだけということはないだろう。
手持ちを知っていれば対策もたてやすいがそう簡単にはいかないようだ。
ユキノは歩いて離れると草むらに隠れて見えなくなった。きっと離れたところでポケモンを出す気なのだろう。
それから少したってユキノが帰ってきた時だった。
「あっ、貴方達！わ、私とポケモンバトルし…てください！」
いきなりおかしなトレーナーが現れた。
「いやだけど」
「何で⁉目と目があったらバトルするのがルールなんだよ⁉」
「そんなもんくそくらえだ」
「えー、そんなー⁉」
おかしなトレーナーはその場にへたりこんでしまう。

「もうお金が…、このままじゃのたれ死んじゃうよー」
どうやら俺たちから金を巻き上げるつもりだったらしい。
「良いわ、そういうことなら勝負してあげましょう」
「ほっ、ほんと？」
「おい、良いのかよ」
「ええ、その代わり、…負けたらきっちり貴方が払うのよ」
「ひっ」
完全に身ぐるみをはぐきだ。背後から恐ろしいオーラが立ち上っていた。
「行きなさい、ユキワラシ」
ユキノが出したのは俺と戦った時と同じユキワラシ。新しい奴がみれるかと少し期待したが見事に裏切られた。
「よーし」
金欠のトレーナーもボールを取り出す。俺達をたおすきだったようだが、以外と強いのだろうか。
「行け！」
ヘンテコなフォームでボールを投げる。
そして放たれたモンスターを俺は一瞬理解できなかった。

そいつの胸で揺れる二つのボールに気をとられたからではない、断じてない。
出てきたのは金色に輝く体、神々しい王冠をかぶり、堂々とした髭をはやしたポケモン。
そう、鯉の王様、コイキングである。しかも色違い。
あまりの衝撃に俺もユキノも開いた口が塞がらなかったが、いや待てと頭をふる。
ぴちぴちと力なく跳ねるあの姿に騙されてはいけない。
もしかしたら物凄い能力を秘めているかもしれないではないか。
「へっへーん、どう?びっくりしたでしょ?」
いやもうびっくりしすぎるぐらいしたよ。
「そ、そうね。コイキングの色違いは始めて見るわ。どこで手に入れたのかしら?」
「ショップで売ってもらったの!しかも特別価格の5万円、私で最後の一体だったんだよ!」
いくらコイキングとはいえ色違いを5万で売るか?しかも普通の売店で?
「最初は500万円だったんだけどまけてくれたんだよ!それで殆どお金使っちゃったんだけど」
あれ?なんだか目からオイルが…。
「ユキノ、もう負けてやったらどうだ?」

「嫌よ、勝負する以上は全力で叩き潰すわ」
ですよねー。
「いくわよ、こおりのつぶて！」
「え、ええっと、みずてっぽう！」
しかしコイキングははねるだけでなにも起きない。
そのままこおりのつぶてが直撃した。
「コイキングー！」
白煙が消えるとそこには所々塗装の剥げたコイキングが倒れていた。
「え？…」
場には重苦しい沈黙が訪れる。
ユキノがユキワラシを戻す音だけがその場にこだました。
しばらくして謎の金欠トレーナーがコイキングにゆっくりと近づいていく。その場につくと崩れるように膝をついた。
「そっか、私、騙されてたんだね」
そういうと傷ついたコイキングを優しく撫でる。
「ごめんね、嫌だったよね。ごめんね、気づいてあげられなくて」
そしてボールに戻すと鞄にしまった。

「つれてくのか？そいつ」
「うん、私のポケモンだもん」
「それはそうと、バトルに負けたのだからお金は払ってもらうわよ」
　まじかこいつ、このタイミングでそれを言うか、普通。
「お金、持ってない…」
「そう、なら別のもので払ってもらうしかないわね」
　別のものって、まさか薄い本的展開か!?これは胸が熱くなりますね。
「とりあえずまずは荷物持ちからやってもらおうかしら」
「うう…、はい」
「それじゃあ、直ぐに次の町に向かうわよ。コイキングも回復しなくてはだし」
「え？」
「え、ではないでしょう。傷ついたポケモンをケアするのはトレーナーとして当然のことよ」
「……ありがとう、ユキノーン！」
　すると金欠トレーナーがユキノに抱きついた。
「なっ、離れなさい！」
「ユキノーン、あ、私の名前はユイ！」

「うむ、ユイユキか、ありだな」
「何言ってんの、お兄ちゃん…」
こうして俺達の旅にまた新たな同行者が増えたのだった。

月下に映る影一つ

コイキング使いのユイを一行に加えた俺達は再び次の町に向けて歩き出す。
「ユキノー、もう疲れたー」
しかしとうのユキノは俺の懇願を無視して歩き続ける。
「もー、お兄ちゃんったらだらしないんだから」
「そーだよ、男の子なんだからしっかりしなきゃだよー」
「俺は男女で差別したりしないの…、ていうかお前荷物持ちなら俺のも持てよ」
「私が負けたのはユキノンだもん」
「そのユキノンというの、やめてくれないかしら？」
「えー、なんでー、かわいいじゃん！ねー」
「はい、かわいいと思います！」
「どこがだよ頭悪そうだろ」
「ハチマンには聞いてませんー」
うわっスッゲェむかつく。てか男女比３：１ってなんだよ。完全にアウェーじゃねぇか。

「そーいえばさーあ、私とハチマンってどっかであったことある？」
　するとユイがだらだらとついていく俺に振り替えってそんなことを行ってくる。
「お前みたいなアホ一度みたら忘れねぇよ」
「むー何それむかつく！」
「んー」
　しかしコマチには何やら思い当たる節があるようで顎に手をあて考えるしぐさをする。
「ユイさんってどこ出身なんですか？」
「えー、チバシティだけど」
「私とお兄ちゃんもですよ」
「えー！ほら、やっぱりそうじゃん！」
　ユイがしてやったりというかおで俺を見てくる。ハイハイ、わかったよ。
「ハチマン、ハチマン、…あー、わかった！もしかして一人だけ旅にでなかった人？」
　どうやら俺の正体がばれてしまったらしい。別に隠してないけど。
「そうだよ」
「そっか、ハチマンがヒッキーだったんだ」
「ヒッキー？なんだそりゃ？」

「町に引きこもってたからヒッキー、みんな噂してたよ」
「どうせいい噂じゃないんだろ…」
「あ…あははは…」
渇いた笑いが俺のぽっかりと空いた胸の空洞にこだまする。
「シャー」
「ありがとうアーボ、俺をわかってくれるのはお前だけだ」
「むー」
「あれ？ユイさんって確か…」
「ついたわよ」
ユキノの声につられて疲弊しきった顔を持ち上げると、そこには町の看板が見えていた。
その後は皆黙って足を動かしようやく最初の町にたどり着いた。
その足で早速ポケモンセンターに向かう。
自動ドアからなかに入ると涼しい風が出迎えてくれた。
とりあえずコイキングだけをジョーイさんに預ける。
なぜ俺はモンスターボールに入れないんだろう。そうすれば簡単に癒してもらえるのに。

「ていうかお前コイキングしか持ってないのか？」
「失礼な、ちゃんと持ってます！」
そういうとバッグからボールをひとつ取り出す。
そして出てきたのはイワンコだった。
「この子、やっぱり…」
するとイワンコは俺の周りをくるくると回り出す。
頭を撫でてやると気持ち良さそうに細く鳴いた。
「…ヒッキー、ほんとに覚えてない？」
「んー、覚えているようないないような…」
「そっか…」
ユイは直ぐにイワンコを戻してしまう。
「ははーン、これは…」
「三人とも、そろそろ出ましょう、今夜の宿を探さないと」
「そうだね、もう野宿はこりごりだもん」
「場所はわかるんですか？」
「ええ、目星はつけてあるわ」
旅をするのが当たり前のこの世界ではホテル業はてっぱん産業の一つだ。

俺達は町に複数ある宿泊施設へと向かった。
そして価格表とにらめっこする。
「お兄ちゃん、どう？」
「泊まれないことはないが、今後を考えるとなー」
小遣いの上限は限られている。節約するに越したことはない。
「ユキノーン、私は…？」
「はあ…、仕方ないわね。私と同部屋でいいなら」
「わーい、大好きユキノン！」
「ちょっとユイさん、くっつかないで…」
既にユキノは陥落済みだった。恐るべしユイパワー。
「ユキノ、ダブルで一部屋とってコマチも入れてくれないか？」
「お兄ちゃん？」
「…それはいいけれど、貴方はどうするの？」
「俺は野宿でいい」
そのままホテルを後にした。
町からでて直ぐのところにテントを張る。
それが終わる頃にはすっかり辺りは夜のとばりに包まれていた。

闇夜に佇む俺一人。やはりボッチマスターの俺は孤独が似合う。ベストアローニストだ。
「シャー、シャー」
「ああ、そういやお前がいたな」
続いて晩飯の準備をしようと小型のコンロを取り出す。
「ヒッキー」
すると後ろから声がかかった。
振り向くとそこには、月光の中佇む女性が一人。
コイキングガールのユイだ。
「なにかようか？」
「えと…、コマチちゃんが様子見てきて欲しいって」
まったくお節介な妹である。
「何か作るの？」
「別に、ただのカップラーメンだ」
もくもくと作業を進める。とはいっても火をつけて待つだけだが。
その間は静寂に包まれる。
「まだ何かようか？」

「え？えーと…」
　ユイは視線を泳がせて話題を探す。
　いや、用がないなら帰れよ。
「そうだ、なんで最初のポケモン、アーボにしたの？」
「おかしいか」
　まあ俺もそう思う。普通最初の一体といえばあまり野生では出現しない特別なやつをもらうものだ。
「ううん、ヒッキーらしいなーって、ちょっと気になっただけ」
「…まっ、何故か最初からなついてたんだ、どっちかっつうとこいつが俺を選んだってことだな」
　すると何故かユイは俺の隣に座ってくる。
「この子も気づいてたんだね、ヒッキーの優しさに」
　そしてそばでとぐろを巻いていたアーボを撫でる。
「別に優しくねぇよ、まだ一度も勝たせてやれてないしな」
「優しくない人はそんな風に思わないよ」
　そんな事はない、俺は誰とも馴れ合わない孤独を愛する人間だ。きっと、優しいのはこいつだ。だから俺なんかもいいやつに見えるのだ。

「お前の最初のポケモンはイワンコなのか？」
「……ううん、この子は実家から連れてきたの」
「？、なら最初のはどうしたんだ？」
「ユミコ…友達が使いたいって言うから貸してたら、そのままはぐれちゃって…」
ユイはてへへと頭の御団子をかきながら照れたように笑う。
しかし手持ちをシェアするという文化がわからん。巷では普通なのだろうか？やはりこいつと俺はあいいれない生き物なのかもしれない。
俺は暖めたお湯を容器に注ぎつつそんな事を考える。
「そういえばさー、どうしてユキノンと一緒に旅してるの？」
「脅されているんだ」
「え!?どゆこと??」
俺はヒラツカ博士の研究所の気を折った事で執行猶予にかけられている。
その条件がユキノと旅をすることなのだ。
しかしふと考える。
それは俺の理由でしかない、ではなぜあいつは俺達と旅をしているのだろうか。
しかし考えても答えはでない。俺はあいつの事を何も知らないのだからそれも当然だ。

そのうちにカップラーメンが出来上がり、ズルズルとすする。この塩気が渇ききった舌には堪らない。

グー。

すると隣から何かの音が聞こえてきた。

見るとユイがうつむきつつお腹を押さえていた。

そしてバッとこちらを仰ぎ見る。

「き、聞こえた!?」

「ああ、腹減ってるのか？」

「っ～～～」

ユイは再びうつむくが腹の虫は泣き止まない。

「ほらよ」

「え？」

俺は食いかけの容器をユイに手渡す。

「いいの？」

「ああ」

そして俺から容器を手に取ると箸を持ったまま固まってしまう。

「どうした？」

「あ、えと……間接キス」
　何いってんだこいつは、やめろよ、俺まで気になって来るだろうが。
「あのな、旅をしてりゃそんなもん気にする余裕もねぇぞ」
「そっか…、じゃ、じゃあユキノンともしたの？」
「いや、あいつは自分でなんとかするから」
「…ふうん、じゃあ、私が始めてなの、かな？」
「いや、俺の始めてはコマチのものだから、そしてコマチの始めては俺のものだ」
「うわー、シスコン」
「いや待てよ、赤ん坊の頃にお袋に、いやひょっとしたらおやじ、…気持ち悪くなってきた、早く食べろよ、さめちまうだろ」
「う、うん、ごめん…」
　そしてユイはようやくズルズルと麺をすすり始めた。

それでも人々はポケモンと生きていく

二人で静かにカップラーメンをすする。しかしその中に不可解な音が混じっているのに気が付いた。
一先ず箸を止める。
汚いさざ波のような音、やはり気のせいじゃない。
「どうしたの？」
「何か来る」
森の方を注意深く観察する。
すると位木陰から黒い煙のようなものが這い出てきた。
いや、煙じゃない、あれは。
「走れ！」
「え!?え!?」
突然の指示に答えられる筈もない。戸惑っていたユイを待っていたらあっという間に取り囲まれてしまった。
ザザザザザッザザッザ。

羽音が周囲を埋める。
スピアーの大群だ。
「ひっ、ひい！むしタイプ!?」
ユイが腕にしがみついてくる。
やめろ、気が散るだろうが。
しかし今はそんな事を言っている場合ではない。
周りのスピアーはどう考えても興奮している。
この場にいては危険だ。
「ユイ、イワンコを出せ。あいつらと相性がいい筈だ。その後は正面に思いっきり走れ」
「う、うん」
ユイはぽっけからボールを取り出してポケモンを出現させる。
「わう～」
当然それが開戦の合図となった。
スピアー達が一斉に攻撃を仕掛けてくる。
俺達は一目散に駆け出した。
「アーボ、どくばり！」
「イワンコ、砂かけ！」

「ばかやろう、いわ技を使え！」
「い、いわおとし！」
二匹の技がスピアーの技を打ち消し、群れに穴を開ける。
しかしそれも直ぐに塞がってしまう。
「アーボ、できるだけ撃ちまくれ！」
「イワンコも、お願い！」
なんとか人二人だけとおれる道を維持しスピアーの群れの中を走り抜ける。
そうしてようやくトンネルを潜り抜けたときだった。
「きゃっ！」
ユイが草に足をとられて転んでしまった。
次の瞬間きをえたりとスピアー達が一斉に攻撃を放つ。
俺は無我夢中でそこに飛び込んだ。
「ヒッキー、ヒッキー!?」
左足が痛い。どうやら避けきれなかったようだ。
「先に行け、そんでユキノ達を呼んでこい」
「いや、置いていけるわけないじゃん！」
「大丈夫だ、アーボもいるし」

「シャー、シャー」
しかしそれでもユイは言うことを聞かず、立ち上がれない俺に肩を貸し抱き起こした。
「お、おい」
「一緒に行こう、それしかないよ」
まったくこいつのお節介さにはあきれを通り越して尊敬するぜ。
しかし今はそれじゃあ駄目だ。
もたもたしてたら
また二人ともとりかこまれちまう。
俺はユイを突き飛ばして無理矢理引き離した。
そして足を引きずってスピアーの群れに突っ込む。
「いや、ヒッキー！」
こうでもしないとあいつは逃げようとしないからな。
再びスピアーに周囲を囲まれる。
回り込まれてしまったってやつだ。
頬を汗が流れる。いくらポケモンの攻撃といっても何度もくらえば大変なことになる。

だが他に方法がないのだから仕方がない、誰かがこいつらを引き受けねばならないのだから。
なんとか早く助けが来るのを願うばかりだ。
「シャー、シャー」
しかしそんな俺の予定を裏切って傍らにたつ存在がいた。
「アーボ、お前…」
「シャー」
正直こいつ一匹いたところでどうにかなるわけじゃない。
だが不覚にもその姿を心強いと感じてしまった。
それからどれだけ戦っただろう、案外そんなに時間はたっていないのかもしれない。
アーボの技のＰＰはつきて文字通りわるあがきしかできない。
既に脚の痛みも限界だ。
俺は力尽きてその場に崩れ落ちた。
そして次の瞬間、周囲を不快に染めていた羽音が一瞬で吹き飛ばされた。
「お兄ちゃん!」
そして代わりによく聞いた声がとびこんできた。
「大丈夫、お兄ちゃん?」

「ああ、大した怪我じゃない」
俺はいつのまにか体の下にいたアーボをモンスターボールに戻す。
周囲を見回すとユキノとその傍らに白いキュウコンがたっていた。
「悪いな、助かった」
「ユイさんの帰りが遅いから様子を見に来てみれば、いったいどういうこと?」
「さあな、たぶん住みかを追われたんだろう」
でなきゃあんな大群が町の近くにまでやって来るはずがない。
他のポケモンに襲われたのか、それとも…。
「そうではなくて…、まあいいわ、とりあえず一度ホテルに戻りましょう」
「俺も行っていいのか?」
「当然でしょう、怪我人を置いていく程薄情ではないのよ」
するとさっきのようにユイが肩を貸してくれる。しかしその表情は優れないようだ。
「ヒッキーのバカ、なんであんなことするの?」
「しょうがないだろ、他に方法がなかったんだから」
「ふんっ」
なんなんだいったい、優しくするのかしないのかはっきりしてほしい。
俺達は傷ついたポケモンをポケモンセンターに預けてホテルに向かった。

「痛い！いてぇって！」
「無茶をするからそうなるのよ」
手当してくれるのはありがたいが、いちいち傷に染みるのはどうしても痛い。
それで今日は就寝となる。
俺はソファの上で眠ることになった。
まあ足がじんじん痛んで眠れそうにないのでどこでも一緒だが。
特にすることもなくぼんやりと天井を眺めていると誰かが傍らにやって来た。
「ヒッキー」
「なんかようか？」
ひょっとしてまだなんかに怒っているのだろうか。
暗がりでその表情はよくわからない。
「まだ、足痛い？」
「別に、明日には治ってるだろ」
まだ痛いがこいつは優しすぎて無駄に心配するきらいがあるので隠すに越したことはない。俺が好きでやったのだからこいつが気にやむ必要はないのだ。
「そっか…、あのね？…助けてくれて、ありがとう」
「…」

心配されるのはめんどうだがこう面と向かって感謝されるのもなんだか気恥ずかしい。
「もう寝ろよ」
「…うん」
するとユイはこっちに手を伸ばしてくる。
何？何されちゃうの？
そして俺の頭の上で何度か手を前後させた。
そしてベッドへと戻っていく。
なんだか脚の痛みもどこかへいってしまって、俺は深い眠りについた。

誰にだって旅立ちの日は訪れる2

翌朝俺達はポケモンセンターで預けていたポケモン達を受け取った。
「それじゃあこれからのことだけれど…」
「いっとくがまだ俺は本調子じゃないぞ」
昨日の夜スピアーにつけられた傷はまだなおっていない。
「仕方ないわね、今日は自由行動にしましょう」
「ほんと? じゃあさっき見つけたドリンクショップ行こうよ!」
「良いですね、って、ユイさんお金は…?」
「あ…」
この天然【笑】トレーナーユイは勝負に負けた金を払えず現在ユキノの飯使いになっているのだ。
「ユキノーン」
「くっつかないで…っ」
主人におねだりするワンコの図。
「はぁ、仕方ないわね…」

そしてこの主人、甘すぎである。
「貴方はどうするの？」
「俺が行くわけねぇだろ」
というわけで俺は三人と別れてぷらぷらと町を歩く。
すると不良に絡まれている美少女というテンプレートな現場に出くわした。
普段であれば面倒はお断りなのでどこ吹く風で通りすぎるところだがちらと見えた少女の横顔が俺の心をつかんで離さない。
なんというか、そうこれは運命の出会いに違いないと俺のゴーストが囁いていた。
「アーボ、どくばりだ！」
「シャー」
「な、なにぃ～。人に向かって技を撃つなんて、なんて卑怯な奴なんだ！お前人間じゃねぇ！」
「トレーナーの風上にもおけない奴だ！」
「うるせぇ！卑怯汚いは敗者の言い訳なんだよ！」
「やべぇ奴だ、逃げろ！」
そういうわけで不良は撃退した。
「大丈夫だったか？」

「はっはい！ありがとうございます！」
　守りたい、この笑顔！
「僕、サイカっていいます、貴方は？」
　僕っ子か、それもいいな。
「俺はハチマン、こいつはアーボ」
「シャー」
「本当に助かりました、しつこく誘われて、僕男なのに」
　そうか男なのか、まあ可愛ければなんでもいいか。
「サイカはこの町にすんでるのか？」
「はい、おかしいですよね。この年でまだトレーナーにもなってないなんて…」
「ちなみに幾つなんだ？」
「１７です」
「そうか、なら全然だぞ、俺も旅に出たのは最近だしな」
「すごい、それなのにもうあんなにポケモンと息があってるんですね」
「んー？ああ、そうだな。別に敬語じゃなくていいぞ、同い年だし」
「そっか、そうだよね、それじゃあ、ハチマンに頼みたいんだけど」
「ん？」

「僕がポケモンをゲットするのを手伝ってほしいんです。そうすればお母さんも納得すると思って」
　なるほど、旅に出るのを親に反対されているのか。まあこんなに可愛いんじゃ無理もないか。
「わかったいいぞ」
「ほんと？ありがとう！」
　というわけで俺達は町の近くの草原にやって来た。
　しばらく歩いていると野生のポケモンが飛び出した。
　現れたのはリオルだ。
　けっこう珍しい奴じゃん…。
「うし、まずはアーボで体力を減らすんだ」
「うん！よろしくアーボ」
「シャー！」
「どくばり！」
　しかしそれをリオルは身軽にかわす。
「!?」
　そしてリオルの電光石火。

「あ…あ…」
　それをアーボもギリギリでかわす。
「ポケモンを信じろサイカ、まずはそこからだ」
「！…うん、もう一度どくばり！」
　そして今度こそ攻撃は命中した。そしてリオルの動きが止まる。
「毒状態だ、ボールは持ってるか？」
「うん、お母さんに内緒で買ったやつが」
　サイカはぽっけからスーパーボールを取り出す。
　一つだけか。
　毒状態とはいえゲットできるか？
「いっけー！」
　ボールがリオルに当たり赤い光とともに収納される。
　ここからはなにもできない、ただいのるだけだ。
　ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、ピコン、シュン。
「やったな、ゲットだ」
「うん！ありがとうハチマン！」
　まあ、この笑顔が見れただけでもよしとするか。

　それから俺達は町に戻った、すると。
「さっきはよくもやってくれたな！」
　いつかの不良達が因縁をつけてきた。
「俺達はお前と違って卑怯な真似はしねぇ、ポケモンバトルで勝負だ」
「使用ポケモンは２体、２ＶＳ２のタッグバトルだ！」
「いや、俺一体しか持ってねぇんだけど」
「ならそいつだけでやるしかねぇな」
　やれやれ、いったいどこが卑怯じゃないのか。
「ハチマン、ハチマン」
　するとサイカが袖を引いてくる。可愛い。
「僕も一緒に戦う！」
「サイカが？」
「うん、僕はもうポケモントレーナーだ、勝負から逃げるわけにはいかないよ」
　というわけでサイカとタッグバトルに挑むことになった。始めての共同作業だ。
「「行け！」」
　相手のポケモンはニャースとヒポポタスか。
「俺は後衛にまわる、前は頼んだ」

「うん、行け！リオル！」
「アーボ！」
アーボはヒポポタスに弱い、だがリオルはニャースに強い、立ち回りが鍵になる筈だ。
「先手必勝、ニャース、アーボにねこだまし！」
不味い、ニャースのねこだましがアーボに炸裂する。
あれは最初だけ相手をかならずひるませることができる。
アーボは身動きとれなくなってしまう。
「ヒポポタス、とっしんだ！」
「ハチマン！」
「構わず攻撃しろ！」
「!?、リオル、かみつく！」
しかしリオルの攻撃は外れてしまう。
「大丈夫か、アーボ!?」
「シャ、アア～」
かろうじて立っているが、おそらく次ダメージを受ければ終わりだろう。
「ごめん、ハチマン…」
「サイカ、今はバトル中だ、心配は時に足かせになる、なんて、俺が言っても信じられねぇ

か」
「ううん、信じるよ、ハチマンのことなら」
「そうか、サイカ、リオルをアーボの後ろに！」
「リオル！」
「がう！」
　指示を聞いたリオルがアーボの後ろにかくれる。
「何する気だ、ニャース、相手の動きから目を離すな！」
「ヒポポタスお前もだ」
「今だ、ヘビにらみ！」
「「何!?」」
　アーボを凝視していた二体が同時にまひ状態になる。
「アーボ、ニャースにどくばり」
「リオル、でんこうせっかだ！」
「よけろ！」
　しかしニャースはしびれてうごけない！
　直後二つの攻撃がクリーンヒットしたニャースが倒れる。
「よし、これで２体１だ！」

「くそっ、なめるなよー！ヒポポタス、あなをほる！」
ヒポポタスが地中に消える。
まずい、これでじめん技をくらえば間違いなくアーボは耐えられない。
しかし自由に地中をいくヒポポタスの動きはまるで読めない。
どうする？例え負けるとしても、何かサイカに残せるものは…。
「リオル、アーボを持ち上げるんだ！」
「!?」
リオルがアーボを持ち上げる。擬似的なふゆう状態、確かにこれならアーボに攻撃するのは難しい。だがその代わりリオルの足が死んでしまっている。
「サイカ？」
「大丈夫ハチマン、僕を信じて」
その横顔は確信を持っている。ならばもう俺が言うことは何もない。
「行け、ヒポポタス！」
相手の宣告とともにヒポポタスが背後から出現しリオルを襲った。
「後ろだリオル」
しかしアーボを持ち上げているリオルはそれをかわすことができない。
けれどサイカの真の狙いはこのあとにあった。

「リオル、カウンター！」
「なにいいいいいい!?」
「がうう!!」
　リオルの必殺の拳がヒポポタスを撃つ。
　ヒポポタスの攻撃の勢い分二倍の威力になったカウンターが見事そのＨＰを削りきった。
「やった、やったよハチマン！」
「ああ」
　こうして不良達との勝負に勝利したのだった。
「ありがとうハチマン、僕、きっとお母さんを説得してみせるよ、そしたらまたバトルしようね」
「ああ」
　そしてサイカは最高の笑顔を残して去っていった。